

## 女のルネサンス — たかぎさわこ

男たちはまだ、女が妻でなく、どの男にも特に所属していない女のあふれた社会を経験していない。女にとっても、「あなた好みの女になりたい」という習性（戦略？）が骨の髄までしみこんで、男の「女」であることに人生の大半を費やす「自由」（安逸）を放棄することは並大抵ではない。そこで、作家の秋山清さんがある雑誌に「合理主義の思考で、平等を主張するくらいなことでは女が男と太刀打ちが困難この上なしである。」と書いているのに大賛成だ。明治以来の女権拡張運動は、しょせん、男のたなごころの上で女たちが「自由」を「選択」もしくは「開拓」して来ただけ過ぎない。男にまともな刃を向けて立ち向かったのは神近市子ぐらいのものだ。女が完全に男と対等な時代では、桐島洋子や榎美沙子の出現はありえない。みづからが輝やくことによって男の世界にも輝やきを与えている。これら「能力ある」女たちも、結局、男社会のトークン（身代り）として利用されているに過ぎない。「Ms」マガジンというアメリカの女性解放運動誌を見てみるとよい。「わが社こそは女性重

役を抜きてきた優秀企業です」なんていう文面の求人広告がこれ見よがしに載せてある。四〇五年前は、「女性」のところが「黒人」だったのだ。日本ならさしづめ「わが社は朝鮮人も部落民も差別なく採用します」てなことになるだろう。姉妹たちよ、もういい加減、アメをしゃぶらされるのはやめにしよう。うっかり毒入りまんじゅうを試食させられて、自家中毒を起こしてはかなわない。一方、日本の女性解放運動の雑誌『女・エロス』創刊号では、女たちが始めて「人間であることなんぞやめて『女』になりきろう」と宣言した。今まで、女たちは男によって「解放された女」イコール「男と同等の人間」というお墨付きをもらうことに腐心してきた。いま、女たちはやっと「男に認めてもらう運動なんかケツ」と言い切るだけの主体性を回復したのだ。わたしはこれを「女の女によるルネサンス」と呼びたい。数千年の「人類」、否、「男類」（英語で *Backland* というそうだ）の「歴史」（これも *History*（つまり *His story*）が経験した「ルネサンス」も女性解放の視点を持ち得なかった点で、片手落ちの「人間回復」ではなかったか。とにかく、「女は人間をやめよう」というようなこんな簡単なことがなぜ今まで言えなかったのだろう。これはつまり「知性」がじゃまをした、というか、とにかく、

明治以来の女権運動を継承してきた先輩女史たちのひとつの限界と思う。村上信彦という女性史「研究家」は、この女・エロスの独立宣言を読んで頭にきた男の一人である。氏いわく「女は人間でなく女だ」と言って女の生きざまを狭い性に固定化して来たのは例外なく男たちであった。」だから「その誤りを打破することを使命としてここ40年間『女の権利』を主張し続けて来た」という。そして、「女は女という性のまえにまず人間である」ことを、ポーボワールが『第二の性』を書いた年より二年も早く彼の著書で訴えたそうだ。この人の書いているものを読むとまさに明治・大正期の女権擁護論をほうふつとさせる。前にも書いたように女が合理的な手段で獲得できる「権利」などは、しょせんは男たちの合理的な判断でどのようにも料理できる。例えば女子社員の若年停年制が性差別で憲法違反だという判決が出れば、会社はさっそく、女の終身雇用を一切とりやめるだけのことだ。つまり女子とは一二年の囑託契約しかない。これは一二年の〇しをして結婚したいという若い女たちの希望とみごとに一致する。したがって、「同一労働、同一賃金」という欧米流の女性解放運動のメイン・スローガンは日本では全くの空念仏になってしまう。春闘の賃上げが14%に押さえられているような国で、どうして女たち

が高賃金の恩恵にあずかることができよう。さて、現代では自由恋愛というのはあたりまえになっている。問題は、カップルの形成↓子の育成という女のライフサイクルをひと通り終えてからでないと女は一人前の「人間」として社会が認めてくれないことだ。つまり、妻でもなし、母でもないという女は「人間」でも「女」でもないのがこの社会だ。そこで、冒頭のような社会が「理想型」として提出される。いったい、女と男が完全に平等で対等な社会とはどういう社会だろう。そこでは、まず男が現在独占しているあらゆる特権、政治機構上の権力、経済力、家長権、買春権（「売春」そのものの是非はともかくとして）を女とわかち合うことから始めねばならない。あらゆる機会の均等を女とシェアすることを恐れてはならない。例えば、教育、就職、家事、育児等々。そういう社会では、女が妻や母であることだけに甘んじなくなるから男も「オレについてこい」風のきいたような口は聞けなくなる。自分はどういう男であるのかを、収入とか家系とか学歴なんかとは関わりのない次元で売り込まねば、「いい女」とは出会えなくなる。これは案外むつかしいことだ。エセ「解放区」、新左翼運動の内部で多くの女の活動家たちが女性解放運動に走ったのも、結局は「いい男」がいなかったからだ。女に捨てられて

オムツのついた子供を置き去りにされることだってあるだろう。自立した女たちは、育児よりもっと楽しいことがあるのを知っているから、子連れナントカなぞ見向きもしなくなる。そうなる乳の出ない男たちは悲劇だ。コインロッカーのごやっかいにならないとは誰が言えよう。ともかくこうした女たちがつくる共同体がイエであれコミュニケーションであれ、もはやそこには男が家長として君臨する余地はない。平等とは本来非合理的ものであるから、ある場合には、強い者が弱い者のために二倍も三倍も余分に働くことを期待されるかも知れない。しかし私たちは、弱者は弱者として女は女として生きられる社会を望む以上、損得勘定を越えて、ほんとうの人間の連帯と相互扶助を考えていかなければならない。そういう社会に至る道のりは途方もなく遠くて長い。私たちの子どもたちや孫の世代でも到達しないかも知れない。いま、少くとも解放への足がかりはできつつある。性の解放を叫び、実践している、「非常識」な女たちが増えているではないか。これからは、未来にどういうかたちで、どういう子供たちを生み落とし育てて行くかがあらゆる解放運動の古くて新しい課題のひとつだろうがアナキズム運動に関わる男性諸兄もそろそろ、世界の中で女のネサンス（国際婦人年の今年を *History for Women*）

この元年としてもよい）が起こりつつあることを自覚せられたい。粉碎すべきは、女性解放運動の何たるかを充分に知らぬところで、みだりに矯少な批判をする人々である。

## 男性闘争者と女性アナキスト運動

アーサー・モイゼ

アナキズムは常に情緒語であって、どんな形態の社会にしろ、それとなじめないで、盲目的且暴力的な復讐を求める人びとにより誤って利用されてきた。平和時にはアナキストを自称する多くの人が、墓場（*grave*）と歴史の中に安全に入っている人達の犯した暴力行為にいつわりの誇りとよこしまな喜びをもつが、同時代の爆弾がさく裂し、銃弾が人を殺すとなると書き言葉と討論の安全な子宮（*womb*）の中に走り込む。私が言いたいのは同志諸君、行動分野が何もないのに行動について偽善的に要求したり、数百頁の論文の標題にだけ存在する組織について感銘深い名前を使用することである。状況主義者（*Situationists*）、直接行動者（*the Direct Actionist*）、革命的アナキスト組織等、パンフの上では立派に読みとれるのに、その事務

所や大学を訪ねてみると一握りの関係者達が、他人には破壊せよと呼びかけるその社会の中で各自の個人的な経済的發展に大部分の時間を割いているのが認められるのだ。同志諸君、私は批判するのはなくただ説明しているに過ぎない。女性アナキスト運動と印刷された標題を見かけるが平常は他の多くのものと同じで気にもとめず、英国における女性アナキスト運動の役割を訊ねられて初めて気づいた訳だ。それならそのグループの組織者である女性達と接触して、女のアナキスト運動の意味と目的を訊ねればよいと人は思うだろう。そこで連絡して幾つかの質問を手紙に書き視点やどういう特殊問題に取組んでいるか、どんな組織を作るのかを聞いてみる。だが何週間たっても返事が来ないか、来たとしても自分は適任でないと行って来る。交友的な手紙だと筆者は自分の名前がでている運動について知識があるとかないとか言うから、結局二三人が紙上で組織化し一握りのタイプした紙の上の頭書だけでいつの間にかひき出しの中に忘れてしまう。私は間違っているかも知れない。しかし同志諸君、私が訊ね手紙を出した限り大体否定的な返事だったから、私としては、一九七五年の女性アナキスト運動は一過的现象で他の多くの組織がそうであるように姪（はら）まれたまゝ死ぬだろうと思っている。だがその死を

傷むにはあたらない。男と女は共通の目的をもつのだとすれば、女だけが分離して集まるのは馬鹿げて居り、もし女がそうすれば共通の闘争において単に支援を受けるとかよくても副次的な地位に甘んじることになる。西欧での女性運動は最初から中産階級の組織であり、その目標は中産階級指向で、国家と法律によって彼女達が男性中産階級の豊かな生活に入らして貰うことだった。私はこれに反対しないし、彼女達のよく出来た多様な誌紙を読んでも傍観者であった。女性解放運動の中産女性性は労働階級の女性に幾つかの政治的平凡な主題を提示したが、労働階級の女性性は中産階級女性の社会的経済的地位の自由と向上運動に参加し損じたのである。労働階級の女性性は自分の自由と独立は個人として英国労働組合を通じて闘い取らねばならないと学んだ。しかも人は労働組合に冷笑を投げつけるがこの運動の中で女性性は田園と工場を問わず、男性と共通の権利を求めて闘うのを学んだのである。ローザ・ルクセンブルグはその「政治権力の奪取」の中で、すべて合法的革新は既存の中産階級を強化するに役立つだけで、労働者階級は自己の運命は自己の創出した組織を通じて管理すべきである」と言っている。右翼軍部の士官が一九一九年ローザを殺した。けれど彼女の言っていることは一九一九年と同じく今日で

も真実だ。女性アナーキスト運動の場所は私達の自由と解放の共通の闘争以外にはないのである。すべての問題は共通責任で解決されるもので、分離した組織でできるものではない。組合運動内で労働階級の女性には異なる労働についても同一賃金と平等権を獲得した。同志諸君、その闘争はまだ闘われて居るのだから何らかの女性運動は不毛である。年令と性別は異なる状況を作りだす。だとすれば私達は同盟者としてではなく同志として闘い、また勝たなければならないのだ。

一九七五年四月二十九日

## 戦前の日本無政府主義

### 婦人運動史年表(草稿)

(まえがき)

(本年表はまったく不完全なものである。年表を作るにあたっては個人的に使用できる資料を中心に難雑な幾多の資料を用いた。一応、戦前までとし、戦後のことは記さなかった。本年表の注釈は末尾に記す。)

| 年         | 代 | 事                            | 件 |
|-----------|---|------------------------------|---|
| 一九〇四・一・二三 |   | 堺利彦、木下尚江ら社会主義協会主催「第一回社会主義婦人講 |   |

|           |                                  |
|-----------|----------------------------------|
| 一九〇四・九・一八 | 旭山生「自由恋愛私見」(週刊平民新聞四五号)           |
| 一九〇五・四・二三 | 木下尚江「醒めよ婦人」(直言二巻一二号)             |
| 五・一三      | 「革命婦人」発行(平民社同人編・平民社発行)           |
| 一九〇七・一・一  | 福田英子「世界婦人」創刊(一九〇九・七・五まで三八号)      |
| 一・二六      | 山川均「男女関係の解放」(日刊平民新聞八号)           |
| 二・一二      | 福田英子・堺為子・菅野スガ等治安警察法五条改正請願を衆議院に提出 |
| 三・二七      | 山口孤剣「父母を蹴れ」(日刊平民新聞五九号)           |
| 一九〇八・三・二一 | 塩原尾花峠雪の彷徨事件(森田草平・平塚雷鳥自殺未遂事件)     |
| 三・二三      | 巖子「女子諸君に告ぐ」(東京社会新聞九号)            |
| 六・五       | 菅野スガ「自由思想」発行                     |
| 一九〇九・五・二五 | 菅野スガ処刑される                        |
| 一九一一・一・二五 |                                  |

|           |                                        |
|-----------|----------------------------------------|
| 一九一一・六・一一 | 青 社発起人会                                |
| 九・一       | 「青鞥」創刊                                 |
| 一九一三・一・一一 | 「青鞥」新しい女特集                             |
| 八・一八      | エマ・ゴールドマン歓迎会                           |
| 一九一四・二・一  | 平塚雷鳥・奥村博士との入籍しない共同生活開始の所信を発表(青鞥に)      |
| 三・        | 平出修「平塚明子の共同生活を評す」(新日本)                 |
| 一九一五・一・一  | 「青鞥」野枝の編集に移る                           |
| 一九一六・一・一  | 「婦人公論」創刊                               |
| 一一・九      | 葉山日影茶屋事件                               |
| 一九一八・八・三  | 富山県漁民女房の米騒動                            |
| 九・        | 平塚雷鳥・与謝野晶子・山川菊栄「母権保護論争」                |
| 一九一九・六・一  | 「解放」創刊、「婦人と社会」(婦人欄)「山川菊栄執筆、解放六号までこの欄づく |
| 九・        | 大日本労働総同盟友愛会となり婦人部設立する                  |
| 一〇・五・夜    | 婦人労働者演説会(友愛会婦人部主催)                     |

|           |                                         |
|-----------|-----------------------------------------|
| 一九二〇・三・二七 | 全国タイピスト組合創立大会                           |
| 四・五       | 「正進」創刊される。「婦人欄」をもうける                    |
| 五・二       | 屋外最初の日本メーデー、堺為子参加                       |
| 一九二一・四・一五 | 羽仁もと子、自由学園設立                            |
| 四・二四      | 文化学院設立                                  |
| 五・一       | 赤瀾会設立                                   |
| 五・?       | 赤瀾会・メーデー参加                              |
| 六・一一      | 大電事件で一六日赤瀾会の一行もつかまる                     |
| 七・一八      | 赤瀾会「婦人問題講演会」                            |
| 七・二二      | 赤瀾会夏季講演会開催                              |
| 九・一八      | 岡谷の女工解放運動促進を目的とする講演会不許可で懇談会(山川夫妻、大杉等参加) |
| 一〇・二〇     | 伊藤白蓮失踪、問題化                              |
| 一九二二・四・二〇 | 治警法五条改正公布                               |
| 一九二三・三・一  | 「種蒔く人」無産婦人号特集                           |
| 六・九       | 有島武郎、波多野秋子心中                            |
| 九・        | 朴烈・金子文子検挙され大逆罪へ                         |



一九二三・九・一六 大杉栄、伊藤野枝惨殺さる  
 一九二四・一二・一三 婦人参政権獲得期成同盟会成立  
 一九二五・七・一〇 細井和喜蔵「女工哀史」  
 一九二六・六・二三 金子文子自殺  
 一九二八・？ アナ系婦人たちによって農民婦人組合運動起さる

七・一 「女人芸術」(二次) 発刊(一・三二・六終刊)

七・頃 反政治的倫理的解放を主張する婦人の集い(労働運動社にて)

一一・五 「A 婦人連盟創設の提唱」小杉美智子(黒色文芸一卷二号)

一九二九・始 「竹内てるよを死なせたくない会」

一九三〇・三・一 「婦人戦線」創刊(婦人戦線社)

文芸講演会

(婦人戦線・農民芸術連盟合同主催)

九・頃 婦人戦線、農民、大地に立つ、農民自治などの有志により解放芸術連盟組織さる

一〇・ 解放芸術連盟より「解放戦線」

一九三一・一・二五 発行  
 二・一二 無産婦人芸術連盟總會  
 七・一〇 農村青年社結成  
 金子ふみ子「何が私をかうさせたか」

# (本年表の注釈)

一、アナ系婦人運動を調べてあまりよくわからないことがわかった。本年表では青、赤瀾会、幅人戦線の三つしか明確だった運動はなかったように思われる。それらは平塚雷鳥、伊藤野枝、堺真柄、高群逸枝、八木秋子というような人々が主だった人々であり、本年表もそれらの人々を主に上げてしまった。

一、平塚雷鳥をアナ系の人とみることに危惧を覚える人々がいるかもしれない。しかし、私は彼女の意志の中に自由に対する大きな憧憬があり、かつまたそれを実践したと思うのである。

一、伊藤野枝の行動には大杉などとのいくつかの行動がある。しかし、それらは婦人運動とはあまり関係がないのではぶいた。「労働運動」と婦人運動とのことを少し記しておく。

一次労働運動(一九一九・一〇・六―一九二〇・六・一)

比較的婦人労働運動を重視していた。

二次労働運動(一九二一・一・二五―一九二二・六・二五) ボルと提携、婦人運動をほとんど無視。

三次労働運動(一九二一・一二・二六―一九二三・七・一) 外国無政府主義運動の紹介ふえる。エマも重視。

四次労働運動(一九二三・一二・二四―一九二六・七・一) エマの特別寄稿以外婦人暗殺者の紹介。全体的にスッ

キリしているが外部へ発散する意気には欠けているようにみえる。

五次労働運動↓未見

一、赤瀾会の消滅は不明。ボル系の婦人達は一九二二・三・八に八日会を結成。人伝てに聞いた所ではこの八日会に影響され、アナ系の婦人は黒色婦人連盟を結成しようとしたそうだが、事実かどうか、又それがどうなったかも私にはわからなかった。

一、無産婦人芸術連盟についてはあまりよくわからなかった。婦人戦線の大抵についてはもう少し時間が必要だろう。

一、山川菊栄、堺真柄、久津見房子といったような人々はそれぞれ伝記様のものがでておりそれぞれアナキズムとの関係を書かれているが私にはよく判断できない。

一、高群逸枝については今日、一つのブームのようにな

っているので省く。

一、カーペンターのものや女性作家、詩人の幾多の作品のあるのを知っているがそれらは記載すべきかどうかからずとりあえず記載しなかった。

一、部落解放運動で婦人水平社のあるのは当然として、そのいづれがアナ系かまったくわからず、それやこれやの理由により部落解放運動のアナ系婦人運動はほとんどわからなかった。

一、一般的に見て次のように言えるかと思う。

明治初期より一九〇四頃までに開明的文化の中で婦人のめざめと以後反動化していく政治体制、道徳に対する道徳レベルでの運動

一九〇四頃より一九一五前後に社会主義思想の拡大とそれに基づく政治的・風俗的反動に対する運動

一九一五前後より一九二五頃に革命意識の拡大と労働運動の勃興

一九二五頃より一九三〇頃に革命運動と労働運動の分化、労働運動の組織化

一九三〇頃より一九三五頃にブルジョア帝国主義の植民地主義と戦争への前奏

一、最後に、私ももう少しアナ系婦人運動を分野別に調べてみようと思う。あまりにも本年表は不完全だが他に

やってくれる人がいなかったので不完全さのまま、載せ  
てしまった。(吉葉)

## アナルコ・フェミニズムについて

### 三浦精一

はしもと君がアナルコ・フェミニズムについての特集  
をやるうと言った。アナルコ・フェミニズム・これは初  
耳だった。アナルコ・サンジカリズムがあり、アメリカ  
ではアナルコ・キャピタリズムも存在している。抑圧す  
るものとしての権力を排し、自由を求める思想としての  
アナキズムが、いろいろに適用されるのである。アメ  
リカのアナルコ・キャピタリストもリバータリアンヘリ  
ベルテール」と称している。アナルコ・フェミニスも同  
様である。

この一文は、マリアン・レイトンの「アナルコ・フェ  
ミニズムとルイズ・ミッシェル」を論評したものである。

### 1、マリアン・レイトンのアナキズム

マリアン・レイトンは「婦人運動において歴史的、現  
代的の両面にあらわれている組織的な傾向に対するアナ

キズムの理論のいくつかを述べ」「独特な伝統の中で  
の婦人の行動の一つの極限的な実例ともいえるルイズ・  
ミッシェルの簡単な心理、社会的分析によって、幼年期  
の性的、社会的な条件の諸特徴が一緒に働いて人間の環  
境と関係し合い、またその環境と相互に影響し合って独  
特な仕方をつくり出すものであるということを最初の分  
析で提示する」と言い、フェミニスト理論の過去にさか  
のぼると、マルクス主義の適用またはその延長線上にあ  
るものが多いが、その膨大な資料の多くは分析的である  
よりも、むしろ叙述の説明であった、としている。  
そして婦人の政治的、社会的不正を強める働きをして  
いる婦人の「自我像」の心理社会的な根本を分析できる  
技術を発展させる必要がある。そのためにこうした技術  
のささやかな展開として、精神分析的理論的展望から、  
ルイズ・ミッシェルの分析を行うといっている。

アメリカでの婦人運動は、中央集権的組織よりも小集  
団構造、階層的組織の諸集団への不信、集団の自発的創  
造、相互扶助、集団間の協同、全面的革命への真実の前  
奏曲としての社会の最下層の意識的高揚の重視、近隣グ  
ループ間の力の連合主義的配分、中央集権的権力発生機  
能の否定的評価といった傾向をもっている。こうしたラ  
ディカル・フェミニズムは本来の姿としてアナキズム

なのだろうか。もしこうした伝統が存在するのだったら  
社会の中での婦人の位置についてのこうした概念の心理  
社会的根源は一体どこから来るのか、と問うて著者はそ  
のアナキズムについて説くのである。

一般にアナキストの伝統は手段と目的との全面的同  
一性を強調し、前衛的組織、『革命的』指導組織とリベ  
ルテール社会主義理論との非両立性を主張して来た。ア  
ナキズムはいつでも他のいかなる社会主義運動よりも  
『個人的』と『政治的』との一致に重点をおいて来た。  
社会的、政治的分析の本質的部分としての個人意識が、  
革命、連帯そして闘争とともにひとしく強調されてきた  
と言いまレー・ブクチンの言葉を次のように引用して、  
フェミニストの経験にしっかりと当てはまると言う。

「……社会主義活動の悲劇は過去にとらえられてし  
まって、われわれを物質的搾取から『解放』しようとし  
る支配の方式を用いることである……われわれは階級  
意識のもっとも進んだ形式は自我意識であることを知り  
はじめている。社会主義活動の悲劇は自我意識に対して  
階級意識を対抗させ、『個人主義者』としての自我の出  
現を否定することにある。——ひとつの自我、それはも  
っとも進んだ形式の共同性（コレクティヴィティー）——  
自治にもとづく共同性を生み出すものである。（アナル  
コス第4号13ページ、自発性と組織について）」

続いてサム・ドルゴフの言葉を、その「アナキズム  
と近代社会」の中から引用する。

「一方アナキストは社会変革の中で経済的要素の  
重要性を、決して過小評価しないが狂信的経済的宿命観  
を排するのだ。社会理論に対するアナキズムのもっと  
も強力な寄与は、いかに政治制度がかえって経済生活を  
型にはめこむかについて、正しく強調してきたことであ  
る。同様に重大な人間の意志、その熱望、道徳的要素、  
そして中でも人類の歴史形成における反逆の精神に重要  
性を付与したことである」。

ブクチンはエコロジー（生態学）をアナキズムに導  
入した。いまヨーロッパでもアメリカでもアナキスト  
の仲間にエコロジーが大きな影響を与えている。オラン  
ダのカプターもその影響下にある。ドルゴフはIWW  
の機関紙インダストリアル・ワーカーにあって健筆をふ  
るったウォブリーの一人である。

こうした引用に続けて、マリアン・レイトンは、もっ  
とも有力なアナキストたちは、論理的に階級意識に相  
伴する自我意識がなければ、いかなる革命も結局は古い  
場所に新しい顔をならべる改良だろうということを確信  
している。抑圧する者と抑圧される者という二分法は単  
に理解するということだけのことであってはならないだけ

なく、しかもそれはこうした理解を越えるものである。結局は性格の新しい鑄型として恒常化されるものである、と言う。

これがマリアン・レイトンのアナキズムの把握であるが、さらにこれに加えて「マルクス主義者のテクニクが、教条的な傾倒した心意によって利用されるとき、資本主義下の経済的関係についての明確な分析と具体的基礎をもった解決を可能にするだろう」と加えている。この論文の前の方でも、また後の方にも、マルクスの経済学に傾倒した所が見られる。近代経済学についても勉強し、その比較の上で語るのが正しい態度であるというべきである。資本主義経済がすでに行詰って、スタグフレーションに苦悶しているのは事実だし、市場経済を無視したロシアの国家の奴僕の社会主義経済も、やっとな権力で民衆の不満を抑えているのではないか。人間の生活と密接な関係をもつ経済についての学問である以上、その学としての仮説は「人間の生活が如何にみたされているかを基礎として、さらに、いかにみたされてゆくべきか」の探究にもとづくものでなければならぬのは自明のことだ。資本主義経済学が一部の者の利益に奉仕し、マルクス経済学が国家の奴僕として生産を重視するのはいずれも大きな誤りで、出発点からのやり直しを要求さ

されているものである。

## 2、アナルコ・フェミニズム

アナキズムがドグマでない以上、アナキズムへのアプローチはさまざまである。ブルードン、スチルナー、バクーニン、クロボトキン、ゴッドウィン、そして前に引用されているマレー・ブクチンやサム・ドルゴフなどそれぞれのアプローチである。精神分析も一つのアプローチに使われる。科学的な成果をふまえて真実の生き方へのアプローチがアナキズムである。このアプローチは抑圧の排除を目指す。だから国家権力という最大の抑圧者の廃止がアナキストのゴールになる。アナルコ・フェミニズムは男性優位という抑圧に対してのものである。他のフェミニズムは国家権力に依存してのものといふべきであろう。しかし僕などはフェミニズムの中にもいろいろなコンプレックスによるものがあることが分るから、こんなフェミニスト優位の社会になったら、アナルコ・マスキリニズムでも主張せねばなるまいと思う。男も女も平等になったら、フェミニズムも何もありません。男も女も平等である。けれども男性、女性の体質や感情の差が一方に抑圧を感じさせることもあるだろうし、抑圧と

いうことの考え方に注意しなければ真実から、真理から遠ざかることになる。さらに平常の考え方もある。単に男女だけでなく親子、兄弟姉妹、友人同志の中でも抑圧を感じることはあるだろう。こうした関係で出来上がっているのが社会である。ここに「自我」というものに深い観察が要求される。ここにアナキズムがある。

アナルコ・フェミニズムについて、マリアンは「分析」という言葉を使うが決して鋭い分析はしていない。鋭さがなくて大分感情が出ている所に女性らしさもあるのだろう。マリアンは言う。たとい「アナキスト運動」が存在したとしても、アナルコ・フェミニストたちは、その現在の立場、すなわち、他の婦人たちと共にあるといった立場そのものにある。男性アナキストが、その首唱する理論に、またその理論の包含するものにふさわしい生活をいとなむということは真赤な嘘だ、という。

男も女もそんなことを言っても矢張り真赤な嘘だ。男も女もそんなことは言えないし、またそんなことを攻撃の材料にできないことも真実なのだが、代議士共のよりに、アラ探しや、あげ足とりで好い気になる者の人口が多いことも事実で、こんなことが共産党、社会党、その他の諸政党のレゾンデールでもある。アナルコ・フェミニズムが一般のフェミニズムと分れねばならないの

は、こうした点にあるはずである。しかるにマリアンはラディカル・フェミニストとアナルコ・フェミニストとのはっきりした区別は自我意識の理論的発達に歩みこんでいる点にあると思う、と言いながら、ラディカル・フェミニストの中にマルクス主義フェミニストを含めて、アナキストの知的伝統の主要な面と同じだというような錯誤を犯している。『自我意識』をどのように捕えているのだろうか。自我の深みに沈潜して自由を考え、自由を求めるからこそ、アナキストとしてマルクス主義と分れねばならなくなるのである。上半身がアナキストで下半身がマルキストだなどと考えマスコミ・アナキストと分れるのも、自我を見つめるからだ。

## 3、バリ・コミューン

マリアン・レイトンのこうした中途半端さとともに、ルイズ・ミッシェルについての叙述は、精神分析的立場に立っているというよりも、むしろ女性としての共感からといった傾向が強い。したがってこの点で好感がもてる。マリアンは、婦人と一八七一年のバリ・コミューンという節の冒頭に、ルイズ・ミッシェルの言葉をかかげている。



「私はコミューンの一共犯者だといわれている。もちろんその通りだ。コミューンがなによりも社会革命を必要としたからだ。そしてその社会革命は私の希望するなかでも、もっとも貴いものだからだ」。

そして今からもう百年以上もへだたっているバリ・コミューンは男性独占の、権力的な政治構造と、比較的自治的でラディカルな婦人たちの組織をもっていた。そしてその中央委員会のメンバーの多くは後のブルードン追隨者、相互扶助の信奉者で、自意識をもったマルクス主義的な者は一人か二人だった。バクーニンもクロボトキンもマルクスもバリにはいなかった。大衆に支持されたコミューンの倒壊は反対勢力の軍事力と、それにかつて物質的欠乏におちいったためだった。この短命だったコミューンの中で、マリアンは無数の名もない婦人たちの自発的な組織活動を再発見する。そしてこの婦人たちの野戦病院従業員たちによって署名された宣言文を引用する。

「彼女等はいかなる社会集団にも属していない。彼女等は革命のためにのみ生きている。彼女等の義務は戦場の真只中で、ベルサイユ軍の有毒弾によって傷ついた人々を看護し、急に応じて他の人々と共に銃をとることにある。万一の場合、どこかで反動が勝利を得たら、彼女たちは火柴に火をつける権利をもっている。どんなところであらうと革命が敗れてはならない。コミューン万才」。

しばしば、男も女も子供たちも全家族がバリケードで肩をならべて戦ったし、三月十八日ベルサイユ軍がモンマルトルの丘の大砲を捕獲して来た時は、家族のパンを得るために婦人たちは子供たちとともに兵士たちの中に突入して兵士たちの企図を混乱させた。婦人たちだけのクラブもできて、自警、売淫、離婚、自由結婚、教会、婦人の仕事について討論し、それが政治的な連絡機関でもあった。コミューンティールの生活で婦人が卓越することは、国の危急を前にして保守的な男性たちにも当然だと思われた。婦人が必要とするところにはどこにでも婦人はいた。理論的な明確性は大きくて重要ではなかった。どの問題もブラグマチズムの精神でとり上げられた。

「婦人たちは、一つの仕事が可能かどうかと聞きはしなかった。しかしもしそれが必要だったら、彼女たちはそれをやりとげようとしてとりかかった」。(ミッシェル著コミューン、一五四ページ)

教育制度の再組織も婦人たちの重要な仕事の一つでルイズ・ミッシェルも熱心に活動した。ルイズは子供たちにラ・マルセーユを歌わせたことを後に法廷で証言している。

婦人たちは一般に、男性にあり勝ちの理論的、綱領構

成的心性とは反対の、実践活動的心性によって、中央集権組織への嫌悪を見せている。モンマルトル丘のパン暴動などもその一つの現われだが、中にはエリザベス・ドミトリーフのようにマルクス主義的中央集権的構造の婦人同盟をつくったものもいた。

フランス革命のときも、コミューンのときも婦人たちともっとも貧しい階級は常に動揺する要素で、大衆の声は散発的に指導陣を強めたが、それが指導陣と一致しなくなったとき、彼等待つものは解散か投獄だった。アナ・キズムえの非自意識的、純経験的近縁性をもつフランス革命のときのサンキュロットの運命もそうだった。非自意識的、非イデオロギー的、草の根らしい反抗の伝統はつねに大衆の中に一貫して存在して来た。ブルードンは理論的に、それに表現をあたえようとした。マリアン・レイトンは「ブルードンはアナ・キズムの、少くともルイズ・ミッシェルや非常に限られた意味に過ぎないが婦人たちの組織の大衆的アナ・キズムの『父』であると考えられている。(彼の影響は主に男性労働者の相互扶助組合を通じてであった)」といっている。この言い分はマリアンがブルードンについて、「婦人は家庭のものであり体質的、知性的そして道徳的に男性に劣るものである」といった悪名高きブルードン、と言っていることと

関係がある。

ルイズ・ミッシェルは一小学校教員として、一人の女としてコミューンに参加した。一人の女性アナ・キスト、ルイズが生れたのは、その流刑中で、捕囚の島ニューカレドニアへの航海中ナタリー・ルメルがはじめてアナ・キズムを語った。そしてナタリーはルイズと、も一人のコミューンの流刑囚シャルル・マラトとでアナ・キズム研究グループをつくった。その頃はまだバクーニンやクロボトキンの著書に接する機会はなかったから、主としてブルードンとコミューンでの体験によるものだった。ナタリー・ルメルはそのときすでに老令で流刑中に死に、刑期を終えて帰ってからマラトは多くの著書を書き、アナ・キズム運動を推進した。ルイズ・ミッシェルはフランスの下層階級の間で組織活動を続け、彼女の名前は反逆と同性愛の同義語としてバリの貧しい人々の口にのぼるのだった。

#### 4、ルイズ・ミッシェル

前節はバリ・コミューンについてのマリアン叙述の概要であるが、この節においてマリアンは、「歴史的な女性革命家のスタイルの見過されている型を心理社会学用語

によって理解するための試みをしようとする」ものであると言ひ女性史の上で、大きく三つの型がある。すなわち参政権開拓者、重要な社会主義理論家、それに新しい生活様式のための婦人発言者（性的解放、既成家族制に代るべきもの、等々）であるとする。そして次の如く続ける。

多くのカリスマ的婦人発言者や著作家たちの動機は急進的、社会主義的運動においても極度に自己犠牲的性質のものであった、このことについて重要なのは、極度に宗教的な表現や表象がヴィクトリア時代と後期ヴィクトリア時代の女性の社会に浸透していることである。これが女性の子供に根をおろした他の自覚的要素と結合してジャンヌ・ダーク様式の革命家の心性を創造した。ルイズ・ミッシェルのカリスマ的スタイルは、このタイプの女性の活動の一つの極である。彼女のアビールの力は大きくバリの貧しい人々から『ラ・ヴィエルジュ・ルージュ（赤い処女）』と呼ばれるに至ったのもジャンヌ・ダーク型との同一性を示すものである。ルイズ・ミッシェルは其の自我像の展開および社会革命と自己との同一視の極端な実例であるばかりでなくまた後にアナキズム理論への意識的接合と固守の極端な実例でもある。

ルイズの生立やその葬儀がヴィクトル・ユーゴーに次

ぐ盛大なものだったことの叙述はここにはとり上げない。しかし一地方貴族の庶子として学校教師が出来るくらいの当時では充分な教育は受け、教会の聖歌隊にも入っていたということ、当時のフランスの社会も深く宗教に滲透されていたものであることを念頭におくべきだろう。以下結論までマリアンの説を要約する。

四十一才のとき、バリ・コミューンに参加して以後、彼女はヴィクトル・ユーゴーなどの文人たちを理想化していたが、ユーゴーや他の文人たちも彼女を理想化した。ユーゴーもヴェルレーヌもランボオも彼女に献詩している。右翼のモリス・バールまでもルイズに献じている。『彼女は聖女である、彼女は聖火であった』

パリ近郊の丘に眠る旧友の墓地を訪れたとき、ルイズは旧友の出現を感じ、生死の境界には何の意味もないことを知った。このような超越的経験を老後にも一度している。マリアンはこれをルイズの革命的神秘性と呼び生命を危険にさらしてコミューンで活躍したルイズの中にも見ようとする。

流刑中に形成されたルイズのイデオロギーは広い意味でのアナキズムで、それに対してルイズは全一的で、個人の生活において何等の偽善も、またそれに代るべき政治体制とのいかなる妥協もなかった。改良主義的手段

には絶対的に不寛容だった。

こうしたルイズをマリアン・レイトンは、マクス・ウェーバーによって、革命的『予言者』としてとらえる。ウェーバーは宗教的予言者の極概念として『倫理的』『模範的』の二つの用語を適用する。倫理的予言者は高いところに存在する客観的實在の道具として彼自身を見る。その信条を『外在』『在天する』客観的實在で、世界にとって何が最善であるかを知っている神々によって聖別してもらったり合法化してもらふ必要はない。ウェーバーはこの倫理にもとずいたタイプは天使階級というその性質によって生じ、当然その追従者たちに『義務』にもとづく動機感覚を附与する。

『模範的』タイプの予言者・革命家は、容器という自我像をもっている。予言者・革命家自身、世界に対して持つ使命との全面的同一性という関係を示す。そうした使命をもち、他の者たちをその儀礼に招くことによって予言者・革命家は其の理想のカリスマの人格化となる。予言者にとっては、『純粋』であろうと努力することが決定的である。

ルイズ・ミッシェルは、この『模範的』予言者タイプとして、ジャンヌ・ダーク的イメージのものとされる。さらにルイズが、男性・女性の経験の異った現実によって、

女性としてその領域を『内部』、家庭の内部、家の内部、集団の内部として感じるようになっていくことも、社会的禁制の厳しかった当時として驚くにあたらない。社会は婦人の核心の人格を受動性、自己陶酔性、マゾヒズムの上に形成されるように奨励して来た。

ジュリエット・ミッチェルがいったように、婦人たちはその抑圧の内化によって、小心になり、しつと深く、狭量で、蔭口を言う動物になり下っている。しかしこうした自己破壊的な性質は、他の別な方法で平衡化したら彼女自身にとっても、他の婦人たちにとっても、また社会にとっても、婦人の最大の特徴となりうる。このように婦人たちは、しばしば婦人たち自身の中に、彼女等が表示している問題の明確な解決をもっている。ルイズ・ミッシェルの偉大さは、あらゆる婦人に潜在する偉大さであることが確認される。

現代のラディカルな婦人運動において、婦人の完全な解放は、物質的世界を現代の形式に組織しているものの、政治的、経済的、そして社会的な全面的革命なしには達成できないことは一般に一致した考え方である。だがこれを越えてラディカルな婦人運動への参加の根拠は——参加に関して功利的であるよりもむしろ経験的——さらにわれわれをつないでいる首長的世界観のいろいろな精



神的きずなの粉砕をふくんでいる。

マレー・ブクチンは『自発性と組織について』の中で、世界への『支配的』アブローチと世界との関係を体現したものととして、現在の左翼の錯誤的存在を論じている。そしてブクチンのアナキズムに関するヴィジョンがルイズ・ミッシェルのヴィジョンと良く一致しているとして引用されている。

「……社会的な見方や個人的態度においてはばかりでなく、『革命家たち』（特に男性『革命家たち』）のやり方においてもまた、経験を解明する。……西洋の自我は、たしかにその男性的形式において、その自己限定と関係の限定において、専有と操作の自我である。……：……アナキストとしてわれわれが求める弁証法は『他者』を対立的に設定するプロメテウスの意志でもなければ、また現象を休止的に受け入れる受動性でもない。……かくてわれわれが求める弁証法は、そのもつとも人間的な表現を芸術と劇に見出すところの絶えることのない静かな超越であって……：……労苦と支配の獣化した『他者』においてではない」。

結局、ラディカル・フェミニストのヴィジョンは、全生活と全生活の交互関係の精神化を意味する。人々と人々との間、そして人々と環境との間の有機的、共働的関

係の回復としての精神化である。この世界の『この場で現在の』確認、そしてこの世界における、われわれの正しい位置の確認をあらわすのである。新しい精神的可能性の概念は、アメリカ婦人運動の多くの最近の著作に靈感をあたえている。

男性がこの現実を理解しようとするときはいつも、全くの自己中心、あるいは没自我的自己犠牲といった二分法の適用によって語られる。ところがルイズ・ミッシェルのような多くの婦人社会主義者たちは、自分自身の権利に優先的重要性を付して理論的革新や発展に集中する傾向は持たなかったし、彼女たちの寄与するところは目立たないものだが、それでも重要性においては同等のものであった。すなわち、主として彼女たちの周辺の『実在する』人々の必要に對する献身と奉仕であった。彼女たち自身の態度は、革命的潮流のもつとも明確で遠大な要素とも動いてゆく、——それとも流れてゆく——といった方向をとるといったものであった。彼女たちの組織は革命をつくり出そうとする組織の優越した他の一面というよりも、むしろ革命によってつくり出されたものであった。

あきらかに、今日、ラディカル・フェミニストの経験の現実と一致する組織的、戦略的そして文化の様式を討

論するひとつの前進的理論を探究し、明確にし、そして発展させることは、ラディカル・フェミニスト自身の仕事である。ルイズ・ミッシェルの一生と仕事の中で、フェミニストの理論と両立する理論的方向として、いくつかの明確な叙述は、アナキズムの常に建設的綜合に向って進んでいる。

以上の要約でマリアン・レイトンの所論の全体は理解できると思う。マリアンはラディカル・フェミニズムの中にアナルコ・フェミニズムを包含させている。しかもマルクス主義線上のフェミニズムもまた包含されている。ウェバーによる予言者のタイプを考へてもそれが純粹への要求をもつものである以上、権力主義と反権力主義は区別されねばならないだろう。日本でも他の国々でも共産党や社会党は反政府的に行動するが、反政府ということとは反権力、非権力とは同じではない。暴力団員でも商人でも反政府的に行動する。人間の原罪とも言うべき権力の否定としてのアナキズムとアナキズムにもとずくフェミニズムとは、権力を容認するフェミニズムとは混同さるべきではない。

ヴィクトリア時代（フランスでは七月革命から二月革命の時代、ルイズ・ミッシェルが生れたのは一八三〇年だからヴィクトリア期以前である。日本では天保時代）

